

江卸発電所建設、遊水池造成時の調査から 朝鮮人の東川村戦時労働、韓国訪問調査を終えて

戦時中のもの不足、人手不足の極めて困難な時代に江卸発電所建設と遊水池造成の工事が行われました。どのような人たちがどのくらい動員されたのか。2年をかけた調べは、3月の韓国訪問調査をもつて一区切りつけました。



小樽工業高校の学徒動員(腹ペコ時代に食事の世話をしてくれた婦人と撮った写真)

に動員され、88名が亡くなり、東14号墓地慰霊碑前で毎年7月7日、慰霊祭が行われています。

中国人のことは知られていませんが、小樽工業高校生が学徒動員され、水車、発電機の据え付けに奮戦していたことは知られていません。旭川、札幌、小樽、恵庭に当時の体験者を訪ねたところ、80代半ばを超えた方たちは江卸建設当時の青春時代を鮮明に記憶していました。

工事現場の写真もたくさん持ってあり、腹ペコ時代に食事の世話をした婦人と撮った写真は、陽気な顔ばかりです。しかし1人が過労・心臓発作のため発電所工事現場で死亡。家族が後志管内蘭越町から駆けつけ、学校葬が執り行わ

れています。

学徒動員体験者らは、朝鮮人労働者のことも記憶していました。「重いセメント袋を2袋も3袋も担いで、導水管横のきつい斜面を登っていった」と。



キム・チュイアル(金彩烈)さん
=旭川市内で撮影したという記念写真=

日発江卸発電所、日比佐太郎所長の建設雑記が北海道電力発行の「足跡」に残っています。

「江卸水力工事現場の労働者はほとんど全部が半島人で、請負者荒井、逢沢両組で運動会をやることになり、労働者全部といえは近頃だいぶ減員したがそれでもまだ9班700人あまりが集まり、逢沢組米田班が優勝旗を獲得した(昭和18年秋)」。

町内の有志が「江卸発電所・忠別川遊水池朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会」(近藤伸生代表、塚田高哉事務局長)をつくり、古老からの聞き取り、韓国で戦時労働

体験者から聞き取りを重ねてきました。札幌の市民グループも早くから同様の調査を続けてきたおかげで概略が分かるようになりました。

唯一の生存者、キムさんを訪ねて

「東川村史」561ページに、村民税賦課人員として工事現場関係(逢沢組、荒井組等)六八三と記述があります。昨年11月、この根拠となるものを町税務課が調べると、役場書庫に保管している『村会』に村民税賦課対象者の記載があり、工事現場労働者名も含まれていました。

昭和15年度から終戦までの

6年間で延べ3千672名、複数年就労の方を分析した実質人数は2千409人に上ります。日本人と朝鮮人が混在した名簿ですが、戸籍の死亡届と一致する朝鮮人労働者は16人、他に朝鮮人かどうかはつきりしませんが事故で4人が犠牲になっています。

朝鮮人は過酷な労働に耐えていただけではなく、村民税を収めていたのです。

そこで実態をさらに詳しく知るため、3月5日から3泊4日で韓国・ソウル市を訪れ、「対日抗争期強制動員被害者調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」から創氏改名、東川村の体験者名簿などを聞き取りし、遊水池工事に従事した地崎組労働者キム・チュイアル(金彩烈)さんを南のハドン(河東)郡に訪ねました。

95歳。国で待つ妻と母のために、電車に乗って旭川に行き、記念撮影したという写真を借りてきました。

東川村での労働経験者は現在、韓国ではキムさん、1人だけになってしまったようです。証言できる方が大勢いるときに村民税賦課名簿を発見したかった、悔いが残ります。

町史編集専門員、西原義弘